

## 刊行終了にあたって

平成六（一九九四）年度末に、通算で一三年の歳月を費やした本学の『東洋大学百年史』（六巻八冊、約八千頁）が、いよいよ完結する運びとなる。顧みると「東洋大学創立百年史編纂委員会」が発足したのは、昭和五七（一九八二）年六月のことであったから、完成の感慨も一入なるものがある。

この大きな事業を完遂するために、いろいろな立場からあたたかいお力添えをいただいた関係各位に対し、ここで改めて深く感謝申しあげたいと思う。とりわけ、本書の編集・公刊の仕事を一気に進捗させるために、一方ならぬご尽力を仰いだ各位に対し、深甚の謝意を表したい。なお、本書に関する大日本獅子吼会の方々のご校閲、資料提供のご協力、ご芳情も、まことにありがたいことであった。さらに、本書を含めた全体の校正刷りに対して法人側の誠意あふれるご校閲を仰ぐことができたのは、嬉しい限りであった。

今回、新しく整えられた『東洋大学百年史』を通読していると、この一世紀に及ぶ間、私立大学としての本学の歩んで来た道が、実に起伏の激しいものであったことがわかる。それは、明治・大正・昭和と三代にわたる激動と混迷の歴史の中を、くぐり抜けて来たこととさえ言える。それ故に、今日まで本学を支えて来てくださった多数の先人の並々ならぬご労苦に対し、心から厚くお礼を申しあげたいと思う。

ところで、戦前、文科系の単科大学であった本学が、戦後に総合大学となり、現在では、白山・朝霞・川越の三キャンパスに六学部を擁し、学生数約二十万人を数える私立大学にまで成長し発展して来た。このように量的な拡大を遂

げた本学が、第二世紀へ向けての旅立ちにあたって、必要としている施策は一体何であろうか。それは、教育・研究の水準を現在以上に高めることによつて、質的な充実をはかり、私立大学としての個性や特色を力強く前面に打ち出すことなのだと考える。換言すれば、より個性的な大学を旨ざすことによつて活性化をはかることになるであろう。その上で、大学のキャンパス全体に香り高い思索の雰囲気溢れ、学ぼうとする姿勢が漲っていることが最も望ましいと考える。

そのためには、幾つかの具体的な方途が考えられるであろうが、ここに完結を迎える『東洋大学百年史』の刊行も、その有力な一助となるに違いない。哲学を基盤とする本学の歴史と伝統とが、この六巻八冊に集約されていると言つても過言ではあるまい。このような内容を有する全八冊の百年史であるだけに、大学史の専門家のみならず、学内外の数多くの人たちに広く活用され、永い生命を持続してほしいものと念願している次第である。

平成六（一九九四）年一月

東洋大学百年史編纂委員会委員長  
東洋大学井上円了記念学術センター所長

神作光一